06 年マアジ

単位：数量、1000 トン、価格、円/kg

	数量										価格						ムロアジ	
年	漁獲	養殖	産地	輸入	消費地 生鮮	冷凍	塩干	消費支出 生(グラ)	在庫	加工塩干	産地	輸入	消費地 生鮮	冷凍	塩干	消費支出 生(円)	漁獲	産地
17	191	2	125.9	44.4	48.4	3.9	17.5	1,717	40.6	53.3	157	121	416	281	535	1,670	22	12.1
18	170	2	109.1	47.8	46.3	2.7	16.8	1,724	35.5		179	129	424	344	546	1,720	32	17.8
%	89	100	87	108	96	70	96	100	87	0	114	107	102	122	102	103	145	147

漁獲量と資源

18 年の漁獲量は 17 万トンに終わり、前年を更に下回る水準で平成 11 年以降の平均 20-25 万トン台をやや下回る低水準であった。

本年は薩南海域を除いて漁獲が低調で、特に主力の山陰海域、東シナ海とも昨年に引続き漁獲が伸びなかった。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、資源量は、1973～1976 年の 23 万～32 万トンから 1977～1980 年の 12 万～17 万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998 年には、51 万～56 万トンの高い水準を維持した。1999 年以降はそれよりやや低く、2001 年には 28 万トンにまで減少したが、その後増加して、2005 年は 51 万トンであった。再生産成功率（加入量÷親魚量）は、（親魚量と産卵量に比例関係があるとして）発生初期の生き残りの良さの指標値になると考えられる。1990～2000 年の再生産成功率は変動しながら減少傾向を示したが、2001 年に再び高い値を示したのち、減少傾向にある。

また太平洋系群は 1982～1990 年代半ばまで資源量は増加傾向にあったが、1996 年の 160 千トンを頂点に減少した。2000 年と 2001 年はやや増加したが、2002 年以降は約 100 千トンで推移している。

以上のように何れも資源水準は中位であるが、親魚量の増加・確保は、資源の安定的確保には極めて重要であるとともに、また当歳魚の漁獲の減少があれば、漁獲量の増加が期待できるとされている。

ムロアジ類

大中型まき網のムロアジ類(マルアジ除く）の CPUE は、1990 年を境に増減を繰り返しながら減少傾向にあり、最近 5 年間でみると横ばい傾向にある。マルアジ CPUE は 2002 年に高い値を示したものの、2003 年以降減少しており、最近 5 年間で見ると減少傾向にある。ムロアジ類およびマルアジ CPUE の相乗平均値は 1989 年に高い値を示した後、減少傾向にあり、1993 年以降おおむね一定の水準を保っている。最近 20 年間で見るといずれも低水準にある。

（近年ＭＡＸ：Ｈ２年　10.9 万トン）

産地水揚量と価格（４９港）

海　域　別　水　揚　量

海域	17年	18年	前年比
東シナ海	69.1	58.3	84
山陰	39.7	35.8	90
豊後水道	1.6	1.2	76
九州東岸	6.0	4.7	77
薩南	1.9	2.1	108
太平洋	9.1	2.8	31
その他日本海	2.8	2.0	71

月　別　漁　獲　量

月	17年	18年	前年比
1	6.8	9.7	143
2	10.4	10.4	100
3	10.1	9.4	93
4	15.7	8.9	57
5	17.4	10.8	62
6	12.4	9.5	77
7	7.3	7.6	105
8	6.9	6.6	96
9	10.2	7.3	72
10	10.3	9.8	95
11	9.5	9.4	99
12	7.6	8.2	108
計	126.5	107.6	85

月　別　価　格　推　移

月	17年	18年	前年比
1	174	124	71
2	110	114	104
3	141	158	112
4	126	198	157
5	168	230	137
6	190	246	129
7	259	306	118
8	236	239	101
9	155	210	135
10	129	123	95
11	116	126	109
12	138	131	95
計	156	179	115

18 年のマアジの水揚量は､10.9 万トンで前年(12.7 万トン)を引続き下回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（４～６月）に極めて低調に推移し、しかも、秋口から冬場にかけても総じて少なく、水揚げは前年を下回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（４～６月）の九州同様引続き大量漁獲もなかったが、秋・冬漁が比較的好調に推移した結果、昨年をやや下回る水揚げにとどまった。

太平洋側では薩南海域で前年をやや上回ったが、その他の海域では前年を下回る漁であった。

魚体は、東シナ海では 100g 以下のアジが 40%(前年 30%)(70g 以下の豆アジは全体の 23%前年 26%)を占め主体であったが、昨年より魚体の小さいアジの漁獲が多かった。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく豆アジ（０～１歳魚）主体で推移し、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、179 円で水揚げの減少を反映し引続き前年（157 円）を上回った。

輸　入

18 年のアジの輸入は、4.8 万トンで５～７万トンの近年の範囲を依然やや下回る水準であったが、前年(4.4 万トン)よりは多かった。

本年は、オランダ 1.6 万トン(前年: 1.5 万トン)、ノルウェー0.85 万トン（前年：0.65 万トン、アイルランド 0.5 万トン（前年 0.3 万トン）で今年はＥＵ諸国からの輸入がやや増加しているのが特徴。また韓国も 0.4 万トンで前年（0.5 万トン）をやや下回ったが、台湾は 0.4 万トン前年の 0.2 万トンを上回った。

本年は、引続き国内漁が低調であったこともあり、輸入量も増加した。

価格は、129 円でほぼ前年(121 円)を上回った。

在　庫　量

本年の在庫量は、3.6 万トンと前年（4.1 万トン）を下回った。

これは、国内生産量の減少を反映したものである。

消費地入荷量と価格

18 年の消費地入荷量（10 大都市）は、4.9 万トン（生 4.6 万トン、冷 0.3 万トン）で前年 5.2 万トン（生 4.8 万トン、冷 0.4 万トン）を下回った。塩干物も 1.7 万トンで前年（1.8 万トン）をやや下回った。

本年の 1 世帯あたりの消費支出は数量が前年並み、金額は単価高を反映し前年を上回った。

価格は、生 424 円（前年 416 円）、冷 344 円（前年 281 円）、塩干 546 円（前年 535 円）で、何れも単価はアップしているが、冷凍物の高騰が目立った。